

サマースクールin西濃

昨深夜からの小雨が未明まで残っていました。スマホのお天気情報によると、春日井市の今日の最高気温は29度、朝から蒸し暑く、歩くと汗ばむ一日でした。今、21時過ぎですが、先程から雨だれの音がきこえています。

9月5日(火曜日)から7日(木曜日)の2泊3日で、COC+参加校5校共通のプログラムである「サマースクールin西濃」が実施され、中部大学から6名、全体で50名の学生が参加しました。

まず始めに、COC+の説明をします。COC+は、文部科学省が支援する補助制度で、“地(知)の拠点大学による地方創生推進事業”の略称です。2015(平成27)年度、岐阜大学を中心とした事業協働機関(岐阜大学、中部学院大学、中部大学、日本福祉大学、岐阜県、一般社団法人岐阜県経営者協会、株式会社十六銀行、株式会社大垣共立銀行、株式会社マイナビ)による取り組みが採択されました。わが国では、「人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる」という負のスパイラルに陥ることが危惧されており、地方・東京の経済格差拡大が、東京の一極集中と若者の地方からの流出を招いています。そこで、文部科学省では、地方の大学が地域の自治体や中小企業等と協働し、地域の雇用創出や学卒者の地元定着率の向上に関する計画を策定することを求めています。

中部大学は、岐阜県からの進学者も多く在籍しており、就職時に岐阜県へのUターンを希望する学生も少なくありません。本事業を通して、岐阜県内への就職先を新たに開拓していくことにより、Uターン就職率を今まで以上に向上させることを目指しています。本学独自のプログラム(岐阜学を主とした特別セミナーやリスク管理関連科目等の正課教育のほか、PBLぎふゼミ、企業現場教育、地域活性型インターンシップ等の課外教育)を実施し、他大学・企業・自治体・金融機関(産・官・学・金・労・言)と協働して岐阜企業と学生との関わりを強化し、地域のニーズにあった人材、「地域活性化リーダー」を育成しています。参加大学共通プログラムとして、企業見学会・サマースクール・企業向け成果発表会等を実施しています。今回は、サマースクールの話題です。

昨年続き、2回目の開催となりました。プログラムでは「西濃圏域に人を呼び込む」を全体テーマに、9つのグループによる“地域振興のための提案”を目指して、フィールドワークや講義等で得た情報を題材とした活発な議論が展開されました。「家族」や「大学生」、「おひとりさま」等の異なるターゲット層ごとのグループになり、初日にはそれぞれ、大垣・養老・揖斐各エリアに出向きました。それぞれの地でフィールドワークを行い、宿舎に到着後、各エリアで得た情報を持ち寄り、熱心に議論して西濃滞在プランを立てました。最終日には、9つのグループによるプレゼンテーションが行われ、それぞれに工夫を凝らした力作が披露されました。どれも「行ってみたい」と思わせる、魅力が伝わるもので、ゲストの皆様からも講評をいただき、みんな熱心に聞き入っていました。大学や学部、学年の異なる学生によるグループ編成でしたが、一人一人が役割を担い、協力し合って成果を出す姿が印象的でした。



サマースクールの様子

2泊3日のプログラムの中、私はオープニングを担当しました。はじめて出会う他大学の学生達ですが、このオープニングで班が決定します。オープニングでは、2時間程度のグループワークのファシリテータを務めました。この役目は、2泊3日のプログラムを遂行するグループの結束を左右する、極めて重要な時間となり、大きなプレッシャーを感じながら行いました。いわゆる、チームビルドです。

中部大学から参加した6名も、集合場所で見せたどことなく不安げな顔が、自信に満ちた顔に見えたのは私だけではなかったようです。中部大学からは、学生6名に加え、上野先生(環境生物科学科)、西垣先生(スポーツ保健医療学科)と丹羽課長(地域連携教育研究推進部)が2泊3日を通して学生を見守ってくれましたが、みなさんが同じような感想でした。はじめて出会った、クロスファンクショナルチームで“プランを立案せよ”と言われても、そう簡単では無いと思います。しかし、集まった50人は寝食を共にすることで、チームの個性を作り出し、そのチームのカラーを出してきました。この成長を考えてみた時、部活の合宿を思い出しました。試合だけを繰り返しても、個人練習だけを繰り返しても、強いチームが作れないことに共通点があるのでは無いかと考えたのです。ある時点で合宿を行い、チームとしての戦い方や勝ちへのこだわりを全員で確認し、個人とチームの関係を集中的に調整するからこそ、チームの基礎を固めることができ、関係をともなった効率的な組織プレーができるようになるの



です。この調整すべきものの機会が、合宿であるのと同じで、今回のサマースクールが良い成長の場となったと、感じました。今回参加した6名の学生の今後が楽しみです。

中部大学から参加した学生達

今回のサマースクールでターゲット地域となった、西濃圏には大垣があります。大垣は、俳人・松尾芭蕉が「奥の細道」紀行を終えた地です。私は三重県の出身ですが、松尾芭蕉も現在の三重県伊賀市出身ということもあり、関心が高くなりました。サマースクールの実行委員長であるS先生(岐阜大学)もおっしゃっておられましたが、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の中で見出した蕉風俳諧の理念の一つに『不易流行』があります。日本俳句研究会のHPには、『不易流行』とは、「良い俳句が作りたかったら、まずは普遍的な俳句の基礎をちゃんと学ぶ。でも、時代の変化に沿った新しさも追い求めないと、陳腐でツマラナイ句しか作れなくなるので、気を付けよう。」ということ」と示されています。つまり、「変えてはいけないこと(基礎)」と「変えなくてはならないこと(新しさ)」があると理解できます。皆さんが、これから社会に出て行くにあたって、解決しなければならない課題があると思います。しかし、それには答えがあるとは限りません。今回のサマースクールでは、正解は無いけれど、やらなければならない、何かひねり出さなければならないと言う経験をし、参加者は達成させました。今回は、正解は無いけれど、やらなければならないと言う、産みの苦しみを十分に味わったのだらうと思います。この経験は、きっと参加者を成長させていると思います。これから、さらに経験値を上げて行って欲しいと思います。最後に、多くの関係諸氏の力でサマースクールを行うことができました。ありがとうございました。

今日は秋学期オリエンテーションでした。学内は朝から活気ある声が聞こえ、新学期を迎える実感がしました。みなさん、よく考えて履修申告してください。来週から秋学期が始まります。みなさん、夏の経験を教えてください。楽しみにしています。

コモンズセンター長 伊藤 守弘